菅波 茂

AMDAアジア医師連絡協議会代表

NGO活動の原点を人権思想から相互扶助思想に……

紛争や災害が起こると、いち早く現地に駆けつけ被災者の医療にあたる。一九八四年の発足以来、AMDA(アジア医師連絡協議会)が世界各地で展開してきたプロジェクトは、継続中のものも含め二一を数える。その代表の菅波茂さんは昨年九月、国連支援交流財団(FSUN)のプロスト・ガーリ賞に輝いた。これは次世代をになう五大陸の未来の「地球大使」に贈られる賞である。その菅波さんにNGO活動の意義や、あり方などをうかがった。

世界の常識は人権思想だが日本は相互扶助思想

「欧米のNGOは、クリスチャニズムの人権思想をバックボーンとして動いています。それを知らないと、世界の常識は理解できません」

その人権思想にはヒューマニズム(人間愛)と、レスポンシビリティ(責任)と、フェアネス(公平)という三つの要素があるという。

「なかでもヒューマニズムによる人道援助は非常に大きな要素で、その緊急救援は〝人道援助の華〟とさえいわれています。世界に放っておけない状況が起ると、そこへ駆けつけ問題の解決に参加するというのが、人道援助の現代的な意味になっているのです。そういう所へ最初に駆けつけるのはテレビ放送局のCNNですが、〝CNN現象〟とでもいうのでしょうか、そこへ駆けつけたか駆けつけないかということが、人権意識があるかないかの〝踏み絵〟になっており、そういった緊急救援のシステムを持っているかないかで、国の良心が問われるというのが、いまの世界の常識になっているのです。それを日本に問われたのが、湾岸戦争だったのです」

AMDAの活動は昨年だけをみても、一月の阪神大震災に続いて四月のロシア・チェチェン難民救援、五月のサハリン大震災とあり、その素早い行動力は記憶に新しい。

「阪神大震災の意義は、人道援助に対して国内でもコンセンサスが得られたことと、日本のボランティアは人権思想ではなく、相互扶助思想で動くということがわかったことです。普賢岳や奥尻島の災害ではあまり動かなかったボランティアも、阪神には全国から集まった。これは阪神に知っている人が多くいたからだと思います。相互扶助思想とは、困ったときはお互いさまという人間関係で成り立っているからです」

その相互扶助思想で「知らない関係」にある国際的な緊急救援は可能かどうか。

「国際社会で問題が起きる要因の多くは貧困です。その貧困対策には、社会開発などの相互扶助が有効です。人権思想は魂の救済で、支援する側とされる側との関係がはっきりしており、時としては両者が衝突することもあります。その点、相互扶助思想は生活の救済ですから、支援される側も、パートナーとして主役になれる利点もあるのです。日頃から社会開発などで協力し、パートナーシップのネットワークをつくっておくと、それが緊急救援のネットワークになる。そういう〝二重構造〟にしておくわけです。備えあれば憂いなしという言葉は、相互扶助思想による緊急救援活動のためにあるようなもので、すわ鎌倉に備えておくということです」

そうなると、「これまで欧米の人権思想の専売特許であった人道援助も、アジアの相互扶助思想で可能になる」と断言する。

「阪神大震災で私たちは、世界でもまれな助ける側と助けられる側を同時に体験しました。これは第二次世界大戦に匹敵する歴史的な体験と教訓だと思っています」

NGO活動のプロを育てるAMDA国際大学構想

日本のNGOに必要なものは、コンセプトだという。

「考え方の基本は平和におくべきだと思います。日本は第二次世界大戦を経て平和を憲法に定めていますし、国連が大切にしているのも国連憲章第一条の平和の維持です」

それとともに、「国際貢献と過疎の地域おこしに目を向けること」だともいう。

「都市には文明という便利さがありますが、過疎の村にはお互いを思いやらなければ生きてゆけないという相互扶助の原点があります。便利さだけの追求では人間性は失われてしまいますから、NGOは過疎に学ばなければなりません。またNGOが海外で、貧困対策などで培ってきた経験や知恵は、過疎対策につなが

●すがなみ・しげる　1946年広島県神辺町生まれ。77年岡山大医学部大学院を修了と同時に、同医学部内科に入局。心臓病センター榊原病院勤務を経て、81年岡山市に菅波内科医院を開業。84年にAMDAを結成し代表に。自らも医療プロジェクトの一員としてボランティア活動を続けている。

▲バングラデシュの医療プロジェクトで診療活動を続けているAMDAのチーム
◀95年12月12日、診療が終わった正午すぎから病院の医務局で白衣姿のまま、インタビューに応じてくれた菅波さん。熱気さえ感じた話は約束の1時間をオーバーしてしまった

ります。それを地域に還元できるかどうかです。そのためには、本部の八五%が東京にあるというNGOの東京一極集中を、改めていかなければなりません」

AMDAではいま、岡山で国際大学の設置プロジェクトを進めている。

「自治体といま話を進めていますが、それはAMDA国際大学構想です。日本にはプロジェクトの専門家はいますが、それをコーディネートできる専門家が少ない。コーディネーターのプロの条件としては、語学力や交渉力に加えて、国境を超えて活動するときの基本的な知識が必要です。たとえば国際法や宗教、それに社会の動きを知る社会学などです。そういったものを身につけた人材を育てないと、いくら国際貢献だといっても、何もできません。この大学構想は、自治体からみれば若い人が集まるという地域おこしになります。AMDAとしては教育機関を持つことで、世界中の現場から集まる情報をもとに、政策をまとめ提言することができます。地域おこしと教育、国連への政策提言というのが、この国際大学構想のねらいです」

九五年六月、AMDAは国連の医療NGOとして認定された。

「もうひとつ、AMDAの挑戦があるとすれば、相互扶助思想を国際社会に一般化させることです。このことは、日本の国際貢献をわかりやすくするプロセスでもあるからです。私たちは相互扶助を"Traditional way of mutual assistant of the community in Asian and African"(アジアとアフリカにある助け合いの伝統的な方法)だと、説明しています。このSOUGOFUJOが国際語になるよう、具体化していきたいと思っているのです」

NGO活動にかかわるきっかけは、高校生時代に見た「第二次大戦のニューギニアで浅瀬に顔をつっこんで死んでいる日本兵の写真」だという。このときから、アジアへのこだわりをもったという菅波さんの熱弁には、圧倒されるばかり。

ガーリ賞受賞の感想をうかがっても、「ええ、まあ」という反応のみ。だが、菅波さんのこのNGO活動に対する熱情こそが、問いに対する答えだったのかも知れない。

(インタビュー構成：森邦久)